



柳菴日記

前篇

三

特別
~ 13
4268
3



113
4268
3



91-2158

朝顔日記卷之二 故芝叟遺話

四回 歌

柳浪 著



砂
玉
光
堂

大内家ハ琳聖大子以来綿々と續きて繁榮比かく武
 威坂山左小ふるひけるが當主大内新介多々良満興殿
 の代小いたして已に數ヶ國が押領し室町家の余よ
 よして西海道の探題とぬもて當家の儒臣は駒澤
 了菴と喚ぶものあり渠ハ肥後の藩中宮城庶助の
 兄弟ふり庶助が八男阿蘇松がたぬは現在の叔父た
 るふよりてふまはたのて此城下小来やがて駒澤
 邸きよたづぬちき始て對面なかり自己の零々たる

安永加保 卷之二

縁由は明白と告て、寄托たまはると、餘義なくたのま
けまは、叔父了菴もとよる、骨肉の因あるうへ頼母一死
人まをば、一議ももよぶぞ承引、快よく款待て舎りど
けま、その了庵先生といへる、山陽山陰の際に技群とる
宿儒よて、博問強記はさらよれいせず、經濟の護身また
たぐひぬし、ふまよめて大内殿よりも重用いらまて、政
勢の商量官よ令けけたし、受業の門弟ともい、日ごしに
門よ市にふし、這里よ集合て、學問を勵せける、さば
ほどよ宮城阿蘇松ハ這家小寓食めて、晝夜刻苦書以
攻て判耶も措たらず、從來天の縱せる英智あるうへ、
螢雪の功積りて、僅う小五ヶ年が間に學文成就してその
見識まよ卓絶たる小ハ、叔父の了庵たよ手は拱やう
小上達せしとや、歌ありて證とぬす。

後陽成院

よまべ入相よす、通達のとあハ夕の風よとひと
ふの五とせのうちに、阿蘇松戸に出不ずして學問のこふ
日なわくししゆへ、させる話しもぬし、おとし十八歳よぬ
まけるその如月のはじめ初冠して、宮城阿蘇次郎紀春
雄と名乗ぬ、かく男とぬるふにけりて、青雲の志やうとふ
く、いさひとまづ京鎌倉よおしひき、仕官なかせき見んと
機かきて叔父了菴よ向ひ小侄よと遊學のため都會へ
のがまたきのぞここべる、當分の暇たまはるべしと、懶懶
小演けまは、了菴首なうりてふまはとぬめ、都會はよまづ

華麗よて少年輕薄の結交好まざるこある所なり。又こそと
とりしめらめと百般賺し一ふりして。渠が望が拒みける。
了菴志うせしハふりき宿意あるやへなり。了菴もと一子祥
一とりのあまども。其の祥一所行放蕩するやへ父の教
戒なもちあむ。了菴こそ見うたてて。遂に勘當ふい
志の餘一男半女もあらねばいと便ふくねもひりとりら。
不料阿蘇次郎が尋ねきたてし見て。その伶俐き才め
るが愛し。おまが螟蛉とねし。こが家督が續せん。其時
より其の準備あてて。熟渠が舉動が見ふよろづ小節は
拘いらぬところある。まつたく志望の大なるやへかへり。精
せしゆへ。今ふまじひよ手放せば。二度回し来るまじと。

おもひをかこて。強よひき止りたる所なり。事よこしに宮
城阿蘇次郎とやくその氣色が見てとり。吾はどめ國を出
日より。御直泰からでハ仕まじと。大なる志がたてしこの
なり。駒澤家五百石の秩禄望むところふあらずと。一通書
留書がのみし。その夜も野干玉の闇よまどきて叔父
了菴が家志のひいで。星夜よこしにけり。ゆたぬるや
ゆる。足曳の山口のかとも廻りのあし見たり。つかくて
日が累ねて歩る不とふ。いつう浪花の大都よいたる。た
およべる墨江四天王寺ふんど。おらりて拜し巡り。それより
北谷として長柄川がうちこたえ山崎の古街道が経て
西嵯峨へ入て。名勝故路がさぶ。不期も名よたてる。山嵐

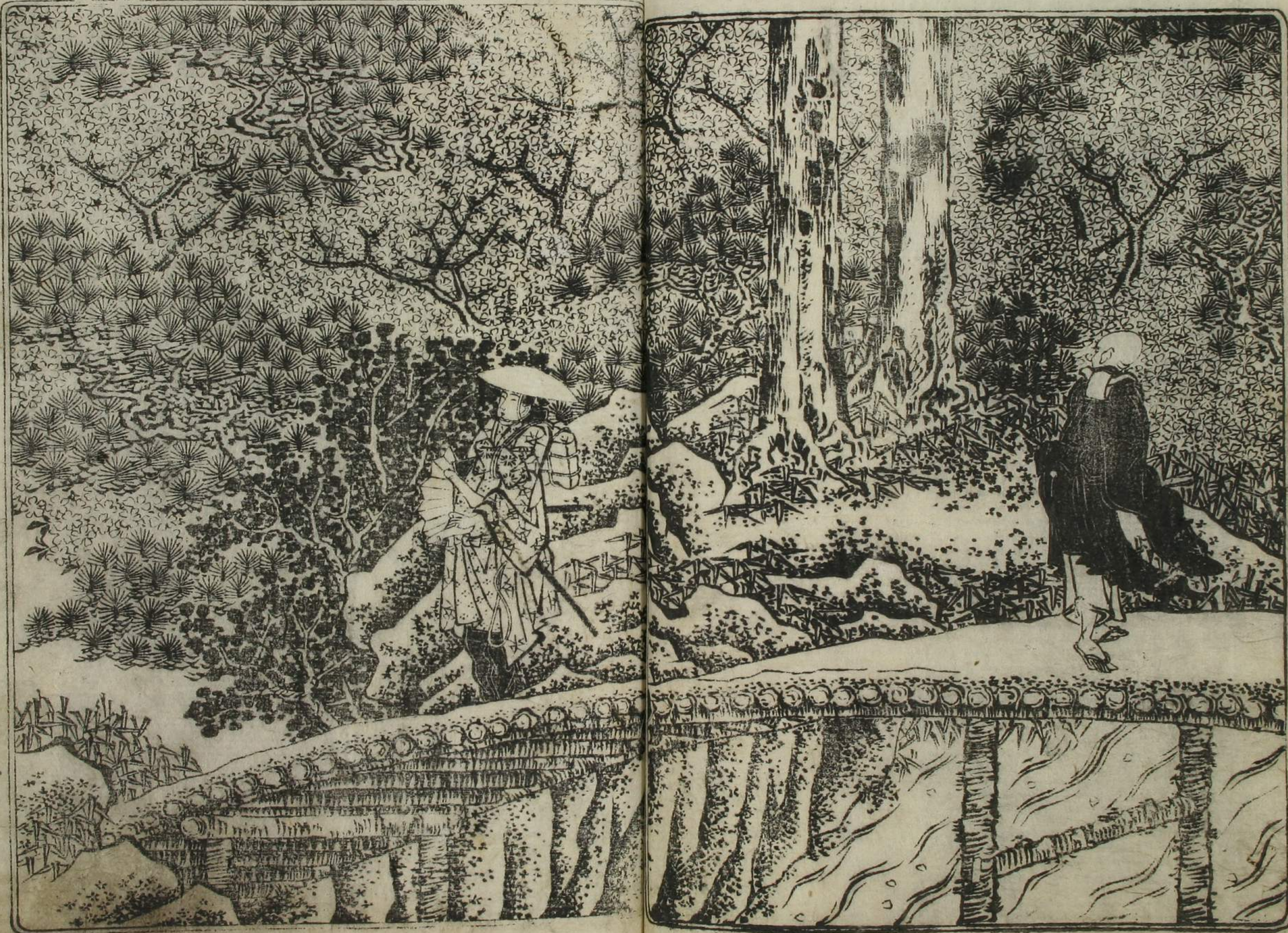
巻之二

三

山の麓よ来て見まば、對面ぬる群峰の形容濃朱の金
 屏風いさほらねーかとうたがいを、下ゆく水の瑠璃も
 も碧ふり。おぬたうふとよ霞あひたる梢ども錦文ひた
 したせるやうよ、百千株櫻花のこや十二分よ爛珊て、
 山も埋ももて見えぬむか里、比しも弥生十日あまて
 おまば、天色の麗々ぬる小人の心ものびらうふて、物面白
 たとてぬるうへ、日いとよくととて、川漆の氣色鳥の声も、
 めくちよげかて、ふのし死土女雲のごとく出さうして車
 轂擊人肩摩、所せきまでうち集合所くよ、懐うちとへ
 てねもみどち圓居しほ、歌よびり詩作るあり、また那
 方の河原より、下謁りきたるが、いよく酔志とて、謡つ舞つ、
 隨意あざまぐるひ花ハ餘外ぬる光景かるしねうし、

さとぐよ洛下として人の打扮の華奢ぬるハ、さらふしハ、す
 世ハ種々よ已ゲ自適るす、ふかく風流たるわそびとさ
 そへるこそ優しけとと、獨語て那里這里と傍徨やが
 て渡月橋ぬたまば、那方よ大やうふる堰のぬる奴見て、
 六の川の名よねへるともことと、つ水無瀬の懸泉のあ
 たまぬる、一樹の櫻の中よ勝とて、真白ふる六と雪文あ
 ざじくハ、あまこの中の老樹かまばふるべし、爰おやんをぬれ御方の
 御遊ふや、桐かー小舟棹くせて、管絃を奏たす入けるが、其声妙
 ふいといたる清となりて、謁たけふるよとつ入をぬれし、
 ふりけて、後もの青よあそらん、嵐の山のそけい木こくま

嵐山の光を
賞しと宮城
阿彌次郎歌
僧月心風流
を談す



巻之二

〇五

〇五

と両三遍うち吟どける。その時誰といふらど、後方より袖と捉へて、今吟せらまゝ一足下の詠もる和歌まづやこつへ、阿蘇次郎つとらう向てみまぬ見もべ頭、唐山巾衣戴き、身は褐色の衲衣を穿たり。殊勝の禪僧とてゆるふぞ、いやしく腰折めて正是小的が詠たる。蜂腰おこ、那の禪僧うち點頭足下の大姓高名、如何阿蘇次郎應て、小的の宮城阿蘇次郎春雄といへる浪人ふ。那の僧こそぬ聞て、まはよきかたらひ人ぬ得たる。貧道は月心として東福寺會下のもの。貧僧も頗この道ぬ者とてべる。いと下居たまへ、霎時ものかたらひてんと。うちひこたたる盤石の塵うちとらひて、二個相對は坐と

占、互に風月の佳話ぬかをもふ。その好めるまゝと色々相符。とぬいた趣ぬまゝけまば、阿蘇次郎も一知己ぬ得たりと悦ひける。月心いへらく、貧道もその峨阜の花見人と、昨日東山より来り遊びて、甲夜の臨川寺に宿をり、佳期おけることおもあまば、今より般舟院にまかして投宿ぬとらひるとも小夜櫻を賞せんはいかど。足下も一同心ぬぬぬいざ伴ふひゆきかんとそむび阿蘇次郎つとらう、今日何如ぬる因縁や。尊者は邂逅、刺へ同宿と誘ひたすこと望の外よろあびかて。自来いそぐ旅よしもあらず見たまふとく、晝間の那のやうの人山人海よて熱鬧しくとぬと俗氣ぬ生ぜり。いとま今宵は月もあまば、夜

阿蘇次郎 春雄

句詩の源氏物語
類聚の巻一
のたにけりし
あつ書官配流
のたにけりし
石の歌
のたにけりし
一落足
けりし御
くまの長
書号の意書
附して口
見企堂

深人静まる小乗て尊者と手ぬ携とへて。月前の花
再賞しべらん。旅ハ伴侶世ハ好意。さらば陪伴アべし
うちつをだちてゆく。その夜阿蘇次郎が月心和尚示たる
が詩として世よのこまり

渡月橋頭人渡月 月明還在緑波間

明も宮城阿蘇次郎月心しほまたち嵯峨山孤たち
出しがけハ天もごんどりとかともとちて。あまもよ
とさよぬり。ちかて太秦よいたまは月心ハまよこのこ
たす小訪人のあまとして。懇よ再會ハ期マて別
はぐ阿蘇次郎も不とし。一夕の奇遇ハ感ト。ふかく
その厚意ハ謝たちこまぬ。さてまの阿蘇次郎ハ

遷の起程マて。とうぐ志き盤纏しても支度せど小の
這里まで来る道上マて。囊金ハ大りたる費使したし
つ。とまどとる大丈夫ふとハ。よまららの瑣々たるおとハ
脅どしもしせどマてけた。阿蘇次郎ハ北野の菅廟マ詣
で。茶店の床ルマヤそらひ。ヤとら茶錢ハ償ハ人と腰
ち財布ハい探見まべ。いつら売マて分半の錢
子さへあらぬ。今宵の房賃ハさらぬ。さしあたる茶錢
かこへときやふたつきなく。わぐえて居たマける。但見まは
對面の繪馬堂よ。うち仰ぎて立居たる漢子の髪ハ髻リ
さかひ手束むりたそのこして。後さよふ反せし。あた
かし慈茄のかたちゆき。羊羹色ぬを一つ小袖うち着て。

巻之二

偽八丈長外套ひつ穿ち短き相口門よし
たるさまいこちる繪馬医者の類おらんと北叟笑しが
渠が這方へふと向たる面ほき何とやら人熟識のやう
なり。世よ似たる人もあるうかと。腫れ定めて看る
らちよ。渠もまゝと阿蘇次郎が見て目なとれたす。一
霎時痴立てうちましましぬ。那の藪醫者の橘雞庵と
て一条戻橋の邊側よ裏店かきて住居せるものおるが
みまより先この雞菴些の瓜葛おたよりて。周防の山口
小下り。國守大内殿の醫官萩野祐安が徒弟とらふそ
こともが玄関番お勤め居しうち。雞庵しとより破落戸
のおとれまび。いつう祐安が息祐仙おそこのかし。とら

花街へはきちき。好々蝶蝶よぞ志たてらる。おふふと
雞菴ハ祐仙が愚蠢お欺負多方騙局をまし。祐仙と
志て。その父祐安が調度よ。圓金二十兩お竊出させ
まをお借とるやいま。その夜よ山口お逐電して。おの頃
京都へ回し居たるなり。おの雞菴比先山口おあましと死
駒澤許へ入門して。その講譯お聞よ来往せしや。この
阿蘇次郎しと熟識おた。さて雞菴ハ殿と阿蘇次郎お
了と認りしや。頗よちうげきうりて。礼おさし。一別以
来契洞の情お叙。またその上洛のちへお問。阿蘇次郎も
礼お回し。小的おと遠の旅行よて囊中も乏しく。か
窶々しく志て。おの見たるお呻吟ぬるよしおあからさま

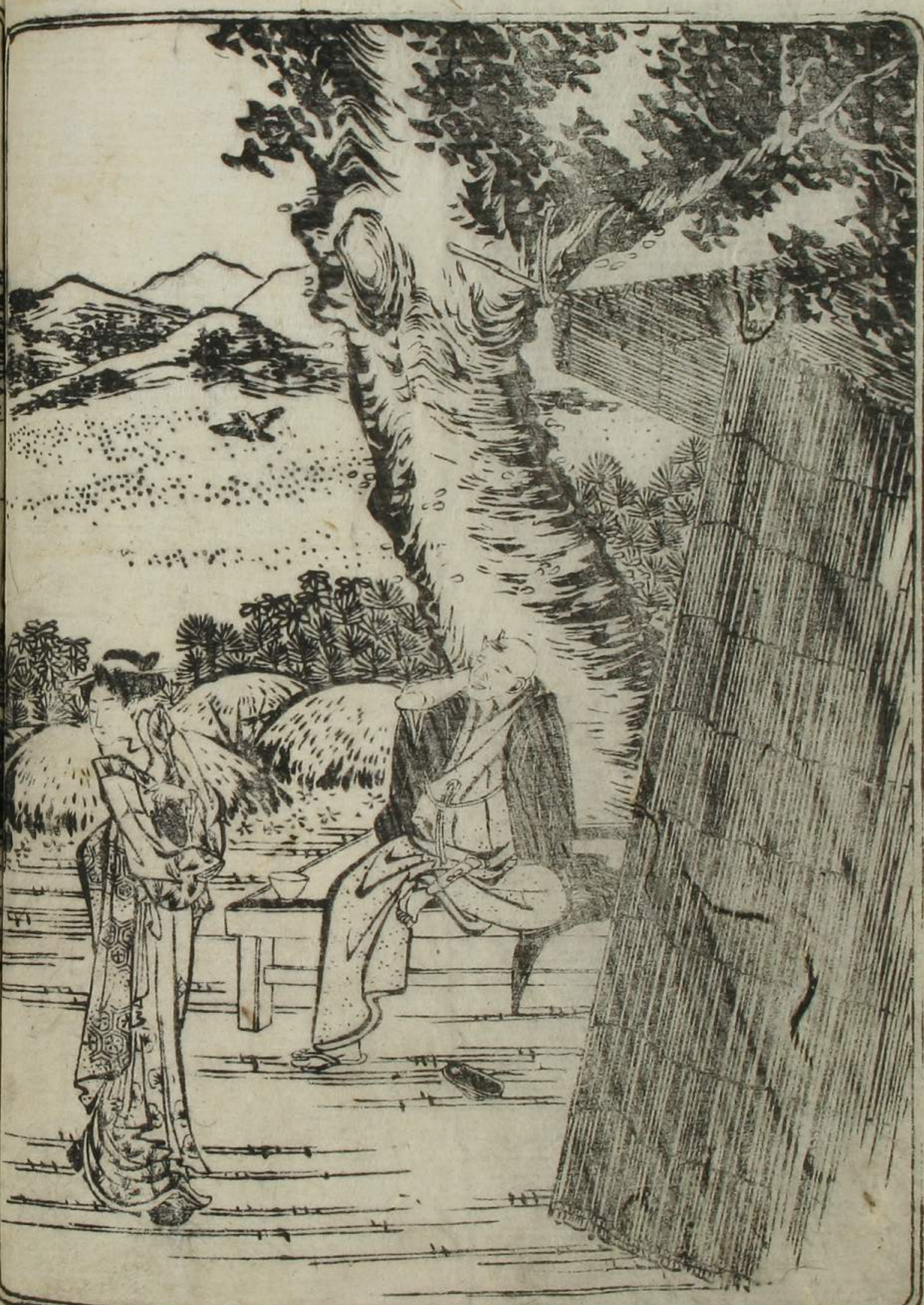
のまをい保

いふちあけて今いひふしとせんとべねし。いふちあてよけんと
と商量なふせば、鶏菴咲面はくま、その嚙窘迫ねらんと
さあらばよづ吾廬へ来たまへ、幾月までも舎藏よふさ
んと、慍慍いさるひけるふと、阿蘇次郎ふりく悦び、
さあらば多擾よめづうまよとべしとあつく感謝と
ふしぬふのと死俄ま天色かきくらしし、雨志をふそぼ
ち来、兩個の忙袖笠して、簷づたひよて、鶏庵が家よ
たどまほきぬ、鶏菴ふとてかく、容易ひとけ留舎し
ぞねまば、渠しと阿蘇次郎が、萬藝は精熟せし事と
よく知ま居あへふまは、香餌よして、榮利は射人との
伎倆なま、そよより官城阿蘇次郎は、橘雞菴が、儼舎よ
在て渠が勸よまうせ、儒書の講釋はは、くけるよ、正
よこま徳孤ふらず必隣あまるとふぶく、満京の諸生
ども、阿蘇次郎の博識は聞傳く、こまししと集合ひ
来て、その門よ入るもの夥しく、ふよよまて、束脩頗叔
納けるふと、雞菴は古打して獨咲し、その束脩も大半
よ掠めとまて、十分計ことを得たまるといと誇りなる顔
貌ねま、おほひね一回阿蘇次郎よ出會、その議論と聞
不どの考、感服せざるいねく、個々その大才と賞して喧
まくいひさいよまて、後ふの由ある人さへ門下よ来ま
あそびて、まよし、繁昌ねしけまとも、鶏庵おのま
のまその利は貪ま、先生よいらくし、小、新衣とも穿せ

ざろやうをねまは。高弟どもも察して不平
 の色はねし。そのしもがら察し小商議して先生はすむ。
 下河原にて一堅の乾々浄々せし空房を借うけ。一切
 の家仗までとてまうぬひ。日なとて阿蘇次郎を這
 里へ移し。まゝ一個の老實なる蠻僮を買て炊夫とす。
 こまへ阿蘇次郎。這里へ下帷せしより。門人まをくあつ
 まて。衣食豊充てを過活ける。この後まをまむらく話ほ。
 日月抜のごとく。宮城阿蘇次郎。しや二十一歳おぞ成り。
 今年いひぬる機運ふや卯月の初つきたよ。鬼道瀬田
 の間。螢の出ること夥しく。夕暮ふどふい眼口ふくいるばら
 りゆて十や二十に一搜も握らるるふどいひのふるよ。浮

やとさ都會の人情。京浪花の人のあをを見んと。隨意
 酒肴を貝へて。樓船にさらふ。漁船にさへあつらひて。宇
 治橋のこたり。所せきまで棹よして。螢狩とぞ競ひけり。
 一日下河原の橋居にて。宮城が内弟子。芦守忠吾。伴
 筑八。兩個かねて示しあひせし。おとよや。阿蘇次郎は向
 先生も聞召るるおとく。おの夏は宇治の螢狩し出で。
 その輝程も格別ぬるよし。先生も朝夕御指南のそふ
 て送日たまへば。御精も竭すべし。明かば一日の閑を偷え。
 試歩あらばよき破悶ぬらん。吾儕も跟随せしめてんと
 懇々勧めまは。緊温問ぬる阿蘇次郎。深等が好意を恃
 りど。その一段有趣べし。容易允諾けまは。兩個はなとく

平野の茶店
橋本
阿蘇次郎
高小誘



雀躍していそそたち。炊夫が驅使手ふぐちとの副副と
けし。小々やうなる食籠の三段はうりある小。そをともものし
て。あろの酒筒はほもるおんご。いと騒がけまは。阿藤次
即去を死見していへらく。その行厨ハ頗沉重なる小。猿助ハ
苗守と寸小。拿人ハいごめさふくとそ人。筑八點頭。明日ハ
面々輪番。看細輪拿小してまいらんとつよよ。大家関
と笑坪よ入る。誰うはからん。阿藤次郎ハよの虫狩よて。
一個の絶美の風流女と奇遇。許多の説柄がふさんとい。

○五回 螢

けいひ日もいとよく晴て清和なる。風とへうちそよめれて。
かのぼらう交加人の袂もふくらうね。官城阿藤次郎ハ
白面青衿。伴筑八。芦守忠吾ハ伴るひ。黎明よて都門と
出て。伏水よいた。豊後橋がた。小倉隄をつたひゆく。
のこりの風景恰も一幅の西湖の圖が看るがびとくたまま。
阿藤次郎ハいと興ありて心のどめき。古詩ふど吟トけりあ。
行は程もへど。宇治の地方よいとて。まづ黄檗山なる高福寺
の山門よ入る。伽藍の荘嚴ども總て支那めきてめづらし。
そまよ。興聖寺平等院ふんど見巡。扇の芝の故跡と
たづね。やがてまた名たる通圓の茶店よた。ちやう茶店
て渴が去のぎ。又しも宇治橋がた。橋姫の祠のはり
小傍徨。經島亀ヶ石。あるの彼佐々木忠綱が乗いた。たる橋
の小嶋が崎ハいつまを捲の島ハあまふらうと。住つ還そつ

躊躇は川の面を見とせバ、あの時ねと未牌の下刻
 ふまども、こや宵燭狩の催とおぼしく、種々の遊舟ども
 陸續と掉のぐり来て、橋の上下の所せきまで、うらり集合て
 執開きまといふる。是を後の世の天満奈小彷彿とら
 阿蘇次郎の兩個の門弟と共に、橋の欄子に靠て、ひたをく
 目奴娛ましめ、心奴慰ら居た。是しを、とこし、間隔て、川上
 ち柳原志げくたちとさたるが。時しも緑の蔭にふくらいて、いと
 冷靜き佳境なるよ、一艘の樓船にけがせて、ぬい誰とも志
 らぬ火のつくし、琴がぞあつべたふ。なまらいたが、鶯舌の、
 伽陵頻をもねもひやらと、その彈音いといは、妙よし
 て。興趣まといふは、か？か？。阿蘇次郎眉うち、擧。六
 古怪や、那舟よてひく、琴曲の志らぬひといふ、頌歌なり。筑
 前の國司太宰少貳殿秘曲なるも、西國小とら、彈人ま
 とね、あのとよ、十八段の、迴波といふ、秘操の、まといひ
 けも、忠吾筑八、今小は、どりぬ、師の、博識よて、音律小
 さへ、精しき、ふと、奴、感、ドける、まの時、ま、河の、面よ、も、那の
 琴曲が、聞んと、おや、夥の、舟ども、漕よ、せて、琴、彈ふ、お、奴
 と、ま、ま、死ける、筑八、あ、の、彈人、の、藝、お、らん、か、何、どの、美
 声、ハ、都、下、よ、ても、た、や、と、く、聞、得、べ、う、らす、さ、ら、す、バ、難、波、女、か
 ろ、う、も、あ、ら、す、阿、蘇、次、郎、い、へ、らく、い、お、し、お、の、彈、音、と、聞
 試るよ、陰声なり、總て、女の、声、ハ、陰、ふる、もの、ぞ、こ、ま、ご、ご、こ
 盲目、ハ、ま、い、り、て、陰、ふる、もの、か、り、ま、の、声、ハ、ま、う、ら、す、た、し、り、

阿蘇次郎
 阿蘇次郎
 阿蘇次郎

ふ女い女ふまども陰中一陽の舎バヤくり両眼あさらり
ぬる未通女ふるべー噫唱かこのちうーとよいでさらば
ちうけきよきて聞まよーと、兩個のものどもと商量橋
詰ぬる漁戸わたのこて、一葉の艇を借うけ直よ打乗船
公役がせて、那の柳蔭の樓船のあたへ掉やらーし船
公いちとやく掉よーて、那の船の真側よまをよせて、擢と
川中よさーとゆめおのもいそのまゝ船端を扱として臥ぬ
阿蕪次郎等へ割籠竹筒まどとて出ー、冷けと酒うち
喫興がたをけて、濤げへーの曲がきくやがて琴弾もや
けとび、集合る船どもい隨意よ散ゆとや、遠ざかるふつけ
て、あといひつそと静まてかへてつ、恰好那の船の障いら
けて、裏面のさまあらは見えぬ、四十むうて女房の紫塩瀬の
袷の上は柿地の小蔓雲鳳の帯が志りて坐したるが、その
膝下は青春十六七とおぼしき小姐ありて、金糸のひ
た繡刺せる緋紋縮緬の襲して、烏金天鵝絨の帯を纏ひ
同年かどの了衆三個むうまかーづき居まて、その側よの
一族の奶くらきたる女客もやの見ぬ、琴の小姐の前は横
たいて在まど、今弾びぬーといらぶろくまてぬ、その
人々の香爐が輪流つ、名香が聞居たる体いと高尚
こそは遷よ物音のまづまてーとむべりりとまらる、浩然
不意一陣の旋風吹かみきて、忽地舟棚よあてたる物件
の軽きかざり、四方八面ぬく吹ちらしたるふ、那の小姐

二五
一

の帕子がしをし吹ふまくて、ふきを捲まけ雲井くもい廻まよとりゆに
 ける。一盞いちさん茶時あての狂風あざしの和なけとば、適間さくま捲ま賜たまたるものど
 も、陸續れいじく墜おちくだりぬ、あるが中なかに那なの小姐むすめの帕子がし、至いた輕かろどけ
 傾かたむも落おちがとく、ひらりとと翻ひら来くるそのさま、帛色ひやくいろの濃こ
 紫むらたふるが、暎やみ暎やみ映うつやきめひて、宛やうも綵さいある鳳凰ほうおうなんどの
 舞まあらととあやまさととつつ了し衆しゆども船ふね檻かぎへ出いて、あまよ
 あまよと悶も搔かどうひふし。那方なう這方このうの舟ふねよりもふきをか
 見みて、コハらの壯觀さうくわんうふと罵ののしまとハぐふ。事こと有い姿あ巧あ
 かの帕子がしの漸ま々ま小こ飄ひら墜おちて阿蘇次郎あそじらうが、船ふねを望まて落おち来くる
 さままままとと萬機轉まんきてんの阿蘇次郎あそじらう倅せと舳しゆの方かたは居ゐあはせ
 たる小こと、そのまま起たちてととづららら槽さうを把とひとつつあちるし
 見みえしが、艇ていに隨まつとままいまぬ、不ふどよき所ところよて、阿蘇次郎あそじらう
 左ひだりの手てハ後うしろさま小こ槽さうをしらら右みぎの手て一いて腰こしぬる扇あふぎ子ご抜ひ
 たり、かの落おち来く帕子がし水際みづぎは二尺ふたしちばらととふて、ふきをかひつか
 け把得とたま見みる人ひと一いっ同どうは唱なう未み嚷さう開あて半响はんきやうハ鳴なうも止やまま
 ける。這時このとき阿蘇次郎あそじらうおもハずととららる槽さうをかせば、とと船ふね
 と隣となりの船ふねと岸がた多た哩れと抵たいて、あたりも粘ねをはきたららやう
 小こうちあひてとぬきやらど、恰さう好く了し衆しゆどもハ船ふね檻かぎあり
 あら由ゆへ、阿蘇次郎あそじらうハそのすす那なの帕子がしハ扇あふぎ子ごに載のせ
 さい出いで、おもハず々々たちの帽ぼうし子ごの侍さむらいららととやとて通とし
 あたりも了し衆しゆの浅香あさか隨ま即すなはちコハかたけぬしと謝あがぬべ
 かの帕子がしハとと扇あふぎ子ごハ回ますとて、仔細しんさいと阿蘇次郎あそじらうと

見みえしが、艇ていに隨まつとままいまぬ、不ふどよき所ところよて、阿蘇次郎あそじらう
 左ひだりの手てハ後うしろさま小こ槽さうをしらら右みぎの手て一いて腰こしぬる扇あふぎ子ご抜ひ
 たり、かの落おち来く帕子がし水際みづぎは二尺ふたしちばらととふて、ふきをかひつか
 け把得とたま見みる人ひと一いっ同どうは唱なう未み嚷さう開あて半响はんきやうハ鳴なうも止やまま
 ける。這時このとき阿蘇次郎あそじらうおもハずととららる槽さうをかせば、とと船ふね
 と隣となりの船ふねと岸がた多た哩れと抵たいて、あたりも粘ねをはきたららやう
 小こうちあひてとぬきやらど、恰さう好く了し衆しゆどもハ船ふね檻かぎあり
 あら由ゆへ、阿蘇次郎あそじらうハそのすす那なの帕子がしハ扇あふぎ子ごに載のせ
 さい出いで、おもハず々々たちの帽ぼうし子ごの侍さむらいららととやとて通とし
 あたりも了し衆しゆの浅香あさか隨ま即すなはちコハかたけぬしと謝あがぬべ
 かの帕子がしハとと扇あふぎ子ごハ回ますとて、仔細しんさいと阿蘇次郎あそじらうと

宮城阿蘇次
即雨佃の門
身ともぬひ
鬼道の行を
待と赴く



看るよ。その俊俏の斯文なる眉清目秀美麗王と欺じき。
一表允ねらず。衣紋のとまり正しく、奉動の溫柔おれども
どまねく厳とせし風趣あり。顔容のけたきさまい光
源氏よ比べく。その神氣のいさましきハ。遮那王丸も
劣るましくぞおほゆ。やがて前のる衆出来。阿蘇次
郎よ對て手ぬ突。礼正しくつやう。婢主母のわうさう
ハ。適間女兒が失いたる。帕子ぬぐをとたまひつゝいひよ
ねき悦びよ侍るふ。唐突おまども謁見とべりて礼と
も叙まくねもひいへば。まうけの酒醴もいし荒とてとべれど。
九献まゐらせねん。おねたへとくらせたまへと請けける。
阿蘇次郎うち圓答て。まづハ帕子御手入悦ばしくこと

さうらく。まご御船よめこと。美酒賜はるべう。ねもお
ろねる仰もいと感激おもひ侍もど。御舟小へ上落のそ
おはすなる小冠者としてちうげき侍らん。世の憚ね
きふもあらず。よて無礼ねづらも同辞中かまことど
叙ける。不衆どもいさうのあまね聞いとす。多方語な
盡して誘ひせたむるよ。忠吾筑八はさきつうさうの
美人の隊よ見とまていと好ましくおもひかどく誕ま
ねとしてあまけるがあまね幸として不衆どもとらるとも
ふ。せひとと先生なとくむとば。不衆どもハまづ人質の
准備よて。忠吾筑八はやく巴が船へいざかひつゝふは
まいて。阿蘇次郎が袖袂よとが。ひととら口説てやま

阿蘇次郎 忠吾筑八 巴が船 口説

まず、謹慎ふり死阿蘇次郎も今ハ不どくしてあまし
ぬ。志のとき年がまゝき侍女のおふる出来コハそのがさ
死石部金吉さまよ。かゝる風流の建風流のまをひと
何ういへるしかるべきいざといひて手だつてあまぬく
ひき入る小ど。了衆どもいさらふ。忠吾筑八まで是は
扶け袖ぬひき腰に推しふどして無難舟の中よいざぬ
ひけ引入る。阿蘇次郎ハ當下かの船の中央よ望と占
まづ東道負ぬる女房よ礼ぬかして。その好意に謝し
おはる。また望並は寒温を叙ける。かの女房ハそこ暮
春景たもども。そづくまきそのさま咲後もたる牡丹の
ぶとくふて。なと一も餘香ぬ失かはず。そまら小姐と

ねがう死ハ世よ冠絶たる標致よて正しく沉魚落雁
の容閉月羞花の粧あり。かの小姐暗地斜秋波かよはすに
阿蘇次郎もおもはず。おつと四目齊視けを。小姐ハ情分と
笑眉はく。袖かき掩宛轉ハ天津乙女の人間よ下
てあそぶよや。あるはま。龍宮の乙姫が海底より出て
慰さむうとぞおもが。筑八忠吾ハあま見えて。やどく
上有頂天。ものつへとこへまば。そらぬ。かの女房は
帕子の礼ぬのべおは。見たまふとく。そらら。船ハ郎
たちとてもぬい。いと興ぬ侍。よ。よくも。たらせ
まひ。と。やとら。盃と。あけて。村醪の酔よ。足ず。野花の
趣きぬ。ふさず。と。まら。世ども。一樹のうげ。一河のながまも

他生の縁といはまうさぞやうらぬくねがしてきこりせ
と。阿蘊次郎よさうらとて。阿蘊次郎もよろあひまたへさ
はうらざるお款待よ遇とべるとふうく感徴なれぬぞれ
どおほうめくまきたいめんふまべかともふうちとけたる
けとひもぬくけんの空の晴和ぬるとまふど演てや風流
たろふとはし不ころぶまふ女房とののこや郭公と聞召れ
はらんといふ。阿蘊次郎いらて。あの夜ころのまろろけ侍
まうど我をひろとてへハふつよ来啼ぬよやちめのひまま
ハおとづも侍をけんおはけりぬく侍るきのハある人の
岩倉よまかまで。初音を聞得とべひやこそつおど清
談をまより敬盃酬盃いと小ざハしとむか？お人と

佳人と一對なれして奇遇ハ正よふも錦の
上よ花をそめるといふべういもさう盛事ぬてうし
ふの光景を見ろしのだし。あるハ羨も。あるハ執柄して
あたりの船より。亡頼ものとおぼしく百般罵しをあひて戯
弄よぞかの女房侍女よ吩咐て。左右の舟窓を扇せつかく
て觸し志をしめぐま来て。志むらくとぬしもとたむをバ
阿蘊次郎ハ此の着酒力。そのうへかくたてふめし船の
裏比ハ四月の天気ぬ。何となく蒸々と炎氣けふ
ゆえぬよげかく側なる扇子とて。三四分をしひらぬ
一。あちとせたまへと會扱なれし。襟のあたまとうら
めふぎ。やとら下よあうんとして。おもはずおぶそふく

ひらと見えたり。一首の歌を写しけたるがまづ筆のすこ
びよのほねねらずをとおがわる。

梅の枝はひる影のたえまよまほきて白く書れしと

阿蘇次郎ハ認あり忠吾が扇ふるふぞ渠が方よ背向ひ
六足下のしらたまひー扇子ぬるう。歌のたま優し
さのさらふて。墨痕のうるいれことつべりもほし何寺
の人の写とーよやそのぬーのうーと問けまバ坑八應
へて。その婦人の詠歌ぬる由さるかさより得るべりた
うあまど。その人ハ誰とゆふいとぬきどとゆふ阿蘇次
郎眉ぬいとゆ。ともあらバ加茂の祐包う。さらすバたき
ぬるらん。今の世都下よて。あまやどの歌よひ人ハ。



